様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００８６

研究課題名（和文）14-15世紀における朝鮮の儒葬受容に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on the acceptance of Confucian funerals in Korea in the 14th and 15th centuries

研究代表者
篠原　啓方（Shinohara, Hirokata）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：９０５１２７０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　14世紀末～15世紀の朝鮮における儒教式の葬儀の受容のあり方を検討するため、ソウル・京畿道地域における被葬者の死亡年・埋葬年が明確な211基の士大夫墓を調査した。墓の墳丘は15世紀半ばを境に方形から円形へと変化し、石造物が登場した。儒葬の方法を定めた『朱子家礼』との比較から見ると、遺骸を収める空間の周囲に石灰を充填する例や、墓碑に見られる葬儀の期間から、儒葬が部分的に実践されていたことが分かった。
　一方で、文献史料には士大夫層の儒葬に関する言及がほとんどなく、議論の対象にはなっていなかったことを示唆する。士大夫層は墓を重視し、個別的かつ可能な範囲で、儒葬を実践していたものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　葬礼の変化は、宗教観・死後の世界観に影響を及ぼした結果と言えるが、高麗時代末～朝鮮時代初期の士大夫墓は、『朱子家礼』の完全な模倣ではなく、朝鮮独自の歴史的・文化的な文脈が反映し、変容した姿を見せる。本研究は、近世東アジアに広がった朱子学の文化が、各地でどのように解釈され、現地化していくのかを明らかにする方法の一つであり、東アジア文化の普遍性と独自性を理解し、文化の多様性と共存を助長していく上で示唆するところが多いと考える。日本においては近年、近世大名墓における朱子学の影響に関する研究が進んでいるが、これらとの比較研究にも一定の貢献をなすことが期待される。

研究成果の概要（英文）：　In order to examine how Confucian-style funerals were accepted in Korea from the end of the 14th century to the 15th century, I investigated 211 scholar-bureaucrat tombs in the Seoul/Gyeonggi-do region with clear dates of death and burial. As a result, stone statues were built around the tombs, and the mounds changed from square to circular in the mid-15th century. A comparison with the "Zhuzi jiali" which stipulated the Confucian funeral method shows that Confucian funerals were partially practiced, such as the filling of lime around the space where the remains are stored, and the funeral period written on tombstones. I found out that it had been done.
　On the other hand, there is almost no mention of Confucian funerals among the scholar-bureaucrat class in historical documents, suggesting that it was not a subject of debate. It is thought that the scholar-bureaucrat class placed importance on graves and practiced Confucian burials individually and to the extent possible.

研究分野：朝鮮史

キーワード：朝鮮　韓国　朱子学　儒教　家礼　葬　墳墓　碑

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

東アジア文化の比較研究において、朱子学の受容をめぐる研究は、主に思想・哲学の分野を中心に多くの業績を上げてきたが、近年、王陵・士大夫墓など墓制（墓葬）に関する調査が進んでおり、『朱子家礼』をはじめとする中国の儒教書で定めた墓や葬礼の規定が、朝鮮でどう受容され、陵墓としてどのように具現化したのかを比較・検討できるようになった。一方、日本においても、近世大名墓に対する儒葬の影響が論じられるようになり、相互比較や共同研究が期待されている。本研究はこうした背景から、特に高麗時代末から朝鮮時代初期（14 世紀末~15 世紀）の士大夫墓を対象とし、墓の地上構造（石造物）・地下構造（考古資料）・マニュアル（儀礼書）という三つの要素から士大夫墓のあり方を総合的に明らかにする。

２．研究の目的

朝鮮時代の墓制（墓葬）研究は、主に１）墓の地上構造（墳丘・石造物）＝美術史、２）地下構造（埋葬空間）＝考古学、３）マニュアル（儀礼書）＝思想史の３分野から進められてきたが、１）と２）はこの 10 年ほどでようやく資料整理と研究が進み始め、３）は単純な内容の比較にとどまる傾向がある。またこれらは 15 世紀代を対象とした研究が少なく、各分野の成果が相互に活用されていないように思われる。本研究の目的は、これらを領域横断的、総合的に検討しつつ、報告者の研究分野である碑石・碑文の考察を加え、墓葬の受容を総合的に論じることにある。

３．研究の方法

研究は、以下の４つの方法を用いて進めた。

①墓のデータベース：首都圏（ソウル・京畿道）を中心に、ソウル・市郡が刊行した『文化遺蹟分布地図』をはじめとする文化財関連書籍、国の各機関が提供するデータベースなどを利用し、目録を作成する。その数は 100 基前後と予想される。

②墓制の検討：墓の構造を地上・地下に分けて検討する。ソウル・京畿道の墓を中心に様式を分類し、地下構造（埋葬主体部、棺が納められる空間）は発掘調査報告書を中心に検討する。士大夫墓の発掘調査報告書は全国で 100 例近くが把握されているが、上記の時期に該当する資料を収集し、造成方法を詳細に分析する。

③文献と朱子家礼との比較：14 世紀末～15 世紀における朝鮮側の文献（正史、文集、『朱子家礼』注釈書）から士大夫の儒葬に関する内容を抽出し、彼らが儒葬をどのように認識していたのかを検討する。

④碑石：士大夫墓に配された墓碑と神道碑について、碑首（上部構造）と碑趺（下部構造）の様式的変遷、朱子家礼と国家の制度との関係、その思想背景、墓葬の変遷との比較を行う。

４．研究成果

以下、上記の方法で立てた項目別に、その成果を記述する。

①高麗末～朝鮮時代初期（1380 年代～1500 年）におけるソウル・京畿道地域の士大夫墓のうち、被葬者の死亡年・埋葬年が明確なものは 211 基と、当初の２倍以上であった。これらを被葬者名・埋葬年・位置・石造物・上空から見た配置図（グーグルアース）などを整理し、目録を作成した。朝鮮（韓国）の墓は、居住村の里山が先祖代々の墓域であることが多いが、この時期の墓には山中に単独で存在し、後孫による管理が行き届かないものも見られた。また後世に先祖の墓を 1 カ所に集める例や、現代の開発事業による立ち退きなどから墓域全体を移動せざるを得ない例、後世新たに石像を配した例なども見られ、石造物の編年には注意を要することも分かった。さらには一族の墓域が市や郡の文化財として指定、整備される例もあった。

②地上構造は、上記の士大夫墓に対し、グーグルアースの衛星写真や図面から、墓の方位や石造物の配置を検討した。墓の方位は様々で、丘陵や稜線の地形に伴って設定されている。墳丘は方形をなし、最下段に石をめぐらせたものが多いが、15 世紀半ば以降、石築の使用が減り、墳丘は円形へと変化していく。当時の王陵をめぐる墓制においては、石材の使用を減らす建議がなされており、この石築は、高麗時代の墓制の名残であることを想定した。一方、下部構造については、上記の士大夫墓の発掘報告はなく検討できなかった。『朱子家礼』においては、棺の外側を石灰で覆う「灰隔」の使用が定められているが、1474 年に朝鮮で刊行された『国朝五礼儀』においては、棺の外側を灰隔ではなく「木槨」を使用するよう定めるなど、『朱子家礼』を全面的に受容していたわけではなかった。一方、発掘調査例の中には、14～15 世紀代と推定される墓のうち、小規模ながら墓壙に石灰を充填するなど『朱子家礼』の内容の一部が実践されていた例が確認されており、地位のさほど高くない者にも広く儒葬が受け入れられていたことが分かった。

③は、上記の期間における正史、文集、朱子家礼の注釈書（現存しないものが多い）を検討した。だがこの時期の史料は、王室祭祀や王陵をめぐる墓葬が中心であり、士大夫層に対する儒葬（治葬）の議論はほとんど見いだせなかった。15 世紀の朝鮮においては、1401 年に設置された儀礼詳定所や、『国朝五礼儀』（1474 年）において喪制が定められた経緯があり、士大夫層同士の議論よりも、国制に従おうという姿勢が強かったのではないかと思われる。ただ 16 世紀以降

になると、『国朝五礼儀』の喪制が『朱子家礼』に忠実ではないとの批判が登場する。一方、史料には先祖祭祀の際に読み上げたと考えられる祝文が散見しており、ここから当時の士大夫層の治葬に関する認識を読み取れると考えた。

④現地調査において、神道碑・墓碑の資料を約 50 例確保した。まず墓碑の位置については、墓の前部中央であるものが多く、『朱子家礼』の「立小石碑於其前」に即っている。次に墓碑の規格については、地上に露出している部分を基準として見ると、家礼の「高四尺、趺高尺許…、但石須闊尺以上、其厚居三之二」よりは小規模なものが多い。碑首の形状は朝鮮時代の碑に特徴的な「荷葉」をかたどったものが多く、『朱子家礼』の「圭首」とは異なる。一方、年月の記載については「立石」の日が多く、次いで「葬」の日が多い。特に「葬」の日は、死亡日からおおよそ４カ月以内がほとんどで、『朱子家礼』の「三月而葬…」（三カ月で葬儀を行なう）の内容に則ったものであると考えられる。

以上、14 世紀末～15 世紀の士大夫層は、『朱子家礼』を全面的に受容したわけではなかったが、儒葬と墓を重視し、個別的かつ可能な範囲で、儒葬を実践していたものと考えられる。ただし今回は部分的な調査から得られたものであり、今後さらなる検討が必要である。加えて今回の調査では、墓碑に文献には見られない一族の情報が記されておりことが分かり、本研究においてその重要性をあらためて認識した。だが墓碑は長い歳月を経て摩耗が進んでおり、内容の記録・保存が急がれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関